

ポスト社会主義時代における宗教の復興

プログラム

日時：2010 年 10 月 16 日（土）午後 2 時 30 分～5 時 30 分 その後懇親会

会場：東京国際フォーラム ガラス棟 G510 会議室

主催：（財）渥美国際交流奨学財団関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）

フォーラムの趣旨

SGRA「宗教と現代社会」研究チームが担当するフォーラム。

社会主義諸国では具体的な政策は多少異なっていたものの、何れの国においても宗教は制限と弾圧を受けていた。しかし、1980 年代以降、多くの社会主義国家の解体によって、これらの国々における宗教の位置づけは大きく変わらざるを得なくなった。経済の市場化その他の改革に伴う宗教の復興が、重要な社会現象として多くの人々によって指摘されたのである。彼らは「宗教が開放された」とするが、こうした捉え方は社会主義の終焉を迎えた（あるいは迎えつつある）諸国における宗教の実情を理解するには不十分である。いわゆる「ポスト社会主義」の諸国は社会主義という経験を完全に忘れてはいない。むしろ、社会主義の経験が、国家と個人それぞれのレベルにおいて宗教との関わり方を形作っているのである。そして、社会主義という過去と改革という現在の間の力学は、複雑で多様な宗教生活を生み出している。ポスト社会主義諸国における宗教の発展から、社会が直面している重要な変遷過程のあり方が見えてくる。本フォーラムにおいては、ロシア、中国、中央アジアという三つの地域に焦点を当てながら、ポスト社会主義における宗教生活の多様性とその課題を紹介したい。

14:30-14:40

総合司会：Kaba Melek（カバ加藤メレキ）（筑波大学大学院博士課程、SGRA 研究員）
開会挨拶：今西淳子（SGRA 代表）

14:40-15:00
【発表 1】

背景説明と問題提起： 社会主義の宗教政策とポスト社会主義の世界

Erik Schicketanz（エリック・シッケタンツ）

東京大学 G-COE プログラム「死生学の展開と組織化」特任研究員・SGRA 研究員

ロシア、中国、ポーランド、ウズベキスタン、ベトナム等、革命政治を中心とした社会主義時代を経た国々において宗教の復興という現象が見られる。本発表ではこれらの国の社会的・文化的状況を示すために用いられる「ポスト社会主義」という特殊な概念を紹介し、ポスト社会主義と宗教というテーマについての背景説明を行いたい。ポスト社会主義とはいかなる状況であろうか？そして、なぜ宗教が課題として出てくるのであろうか？これらの問題を理解し、またポスト社会主義の直接的な歴史的背景となっている社会主義国家の宗教政策を概観的に検証したい。

ロシア連邦における キリスト教の興隆

井上 まどか

清泉女子大学キリスト教文化研究所客員研究員

15:00-15:20
【発表 2】

ロシア連邦および中東欧諸国において、社会主義体制の崩壊後にみられる「宗教復興」にはどのようなファクターが見いだせるだろうか？また、この「宗教復興」はどのように性格づけられるであろうか？さらに、社会主義時代の経験はいかなる特徴を形作っているであろうか？本報告では、キリスト教の復興という局面に焦点を絞り、ロシア連邦を中心に、中東欧の事例と比較しつつこれらの問いを検討する。ソ連崩壊後、政治体制や経済のみならず、教育、医療、福祉諸分野の大きな制度改革が行われ、ロシアでは人々の「精神の空洞化」が盛んに論じられた。宗教に関わる領域においては、自由化／市場化ともいえる状況が出てきたが、1990年代後半以降、そうした宗教の市場化を規制しようとする政府の姿勢が、ロシア正教会との諸分野での協力関係構築というかたちで見いだされる。本報告では、ロシア連邦の宗教政策の変化に言及しつつ、宗教を日々の営みにとり入れていく人々のありようを上記の問いに沿って考察していきたい。

中央アジアにおけるイスラームの復活

Timur Dadabaev (ティムール・ダダバエフ)

筑波大学人文社会科学研究所准教授

15:20-15:40
【発表 3】

近年の国際情勢において、宗教、特にイスラームは重要な要素となっている。それは旧ソ連中央アジア地域でも例外ではない。この地域における宗教の位置づけ・役割はソビエト連邦の成立と崩壊によって大きな変容をみた。中でも、近年、様々な過激派が中央アジアへ侵入し、また、経済状況が悪化する中、イスラーム過激派運動の支持基盤が強化されたことは、各国政府を警戒させ、宗教と国家の関係を見直す契機となっている。そのような状況下、中央アジアにおいて宗教はどのような役割を果たしているのか。ソ連時代とその後におけるいわゆる「日常イスラーム」はどのようなものなのか。また、近年、中央アジアに姿を現した宗教原理主義の歴史的・社会的背景は何なのか。各国政府の対応とその効果はいかなるものだったのか。そして、それが中央アジア情勢に与える影響はいかなるものなのか。本発表では、これらについて検討を行う。

中国のキリスト教

～土着化の諸段階とキリスト教の社会的機能～

Mira Sonntag(ミラ・ゾンターク)

立教大学文学部キリスト教学科准教授・SGRA 研究員

15:40-16:00
【発表 4】

| | |
|-------------|--|
| | <p>毛沢東による文化大革命においてキリスト教とイスラーム教は勿論、中国が本土であった仏教、及びその他の宗教も物質的・精神的両面において大きな被害を受けた。キリスト教は存続こそできたが、迫害の経過からプロテスタント派キリスト教は二つの流れに別れてしまった。両派の対立は、1980年から政府による宗教団体を対象とした政策により被った被害に対する賠償請求などを含めた復権にもかかわらず、現在に至っている。一方は、1950年代の三自愛国運動に遡るが、宗教団体として政府の公的認定と政府との協調路線を望む現中国基督教協会加盟の諸教派である。もう一方は、政府の干渉を何時でも防ごうとする家庭教会である。これらプロテスタント派もカトリック派もこの30年間に信徒数を伸ばした。経済成長を支える都市化によって薄まりつつある家族の連帯感を補強する家庭教会であれ、他者の尊重、隣人愛と公正を「自由に導く自制」として教える中国基督教協会の諸教会であれ、急速な社会変動を消化しなければならない国民の道徳観の健全化への貢献が期待されている。しかし、同時に、家庭教会の周縁に、メシアを自称し、終末思想などを喧伝するキリスト教系の新宗教が相次いで誕生しており、キリスト教そのものに対する政府の姿勢は依然として不安定である。本発表ではそれぞれが現代中国において担う役割について説明したい。</p> |
| 16:00-16:10 | 休憩時間 |
| 16:10-17:30 | <p style="text-align: center;">パネルディスカッション</p> <p style="text-align: center;">進行：島蘭 進（東京大学文学部宗教学科教授）</p> <p style="text-align: center;">パネリスト：陳 継東（武蔵野大学人間関係学部准教授）、</p> <p style="text-align: center;">上記講演者</p> |
| 17:30 | 閉会挨拶： 嶋津忠廣（SGRA 運営委員長） |

講師略歴

■ エリック・シッケタンツ Erik Schicketanz

1974年、ドイツ（プフォルツハイム）生まれ。2001年、ロンドン大学東洋アフリカ学院（日本学）修士。2006年、東京大学人文社会系研究科（宗教学宗教学史学）修士。同年、東京大学人文社会系研究科宗教学宗教学史学博士過程入学。2010年から現職。主著としては「現代中国における清明節の復活—共産党政権の文化政策における祖先祭祀の位置づけについての考察」『死生学研究』第13号（2010）。

■ 井上まどか（いのうえ・まどか） Inoue Madoka

1971年東京生まれ。立教大学、成城大学、神奈川大学、聖心女子大学にて非常勤講師を務める。清泉女子大学キリスト教文化研究所客員研究員。現代ロシアを中心とした旧社会主義圏の政治と宗教を専門分野とする。東京大学大学院宗教学宗教学史学専門分野博士課程修了。博士（文学）。2001年より2年間、サンクト・ペテルブルグ国立大学の宗教学宗教学哲学研究室で学ぶ。著作に「宗教の公共化と政治資源化をめぐる—『宗教復興』再考」（『現代宗教2005』東京堂、2005年所収）、「現代ロシア連邦における政治と宗教—宗教関連の法制化を中心に—」（『<宗教>再考』ペリかん社、2004年所収）などがある。訳書に『現代世界宗教事典—新宗教、セクト、代替スピリチュアリティ』（クリストファー・パートリッジ著、井上順孝・井上まどか・富澤かな・宮坂清共訳、悠書館、2009年）などがある。

■ ミラ・ゾンターク Mira Sonntag

1971年(旧東)ドイツ生まれ。1997年、ベルリン・フンボルト大学大学院人文社会学部の修士課程終了(メジャー:日本学、マイナー:神学とロシア語)。1996年から2年間、同大学の日本文化センターに就職。1998年、東京大学法学部社会科学研究所に研究生として来日。2000年、東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教学史学専門分野博士課程入学、2005年、博士課程終了(2008年に文学博士授与)。その後5年間、富坂キリスト教センターの研究主事(2008年から総主事)として「日本の国公立学校における宗教教育」研究会も担当。2010年4月、立教大学文学部キリスト教学科准教授(アジアのキリスト教講座)に着任。

主な研究テーマ:日本の宗教思想教育、アジアのキリスト教、女性神学、宗教教育。

著作:(共著)『宗教を考える教育』教文館(2010年)。「生命の不思議なる理性—中田重治、内村鑑三と木村清松の再臨運動」『内村鑑三研究』43号(2010年)、68~93頁。(学位論文)『大正期日本における合理主義と救済—1918年~19年のキリスト再臨待望運動の「厚い記述」』、www.bookpark.ne.jp(オンデマンド出版、2009年)。「内村鑑三と福沢諭吉—その文明論をめぐって」『内村鑑三流域』第一号(2000年)、20~43頁。

“The life of a ‘Western white middle-class woman’ in Japan,” in *In God's Image*, vol. 28, no. 4 (December 2009), 61–66. “The structural limitations of religious education in Japan,” in *Bulletin for the Council of Societies for the Study of Religion* Vol. 34 No. 4 (November 2005), 66–69. “Christian education at Aishin,” in *The Japan Mission Journal* (Fall 2005), 172–190. „Uchimura Kanzô. A Bibliography of Studies and Translations in Western Languages,” in *Japonica Humboldtiana* Bd. 4 (2000), 129–76.

■ ティムール・ダダバエフ Timur Dadabaev

1975年ウズベキスタン、タシケント生まれ。筑波大学人文社会科学研究所准教授、東京大学人文社会研究科付属次世代人文学開発センター客員准教授。コロンビア大学ハリマン・インスティテュート客員研究員(日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業)(2010年)、ケンブリッジ大学、(東京財団教員海外派遣プログラム)客員教員(2006–2007年)、オックスフォード・イスラーム研究センター(OCIS)Al-Bukhariフェロー(2006年)、東京大学東洋文化研究所助教授(2004–2006年)、国立民族学博物館・日本学術振興会外国人特別研究員(2002–2004年)、国連大学秋野豊基金フェロー(2004–2005年)、UNESCO-小渕恵三基金フェロー(2002–2003年)を経て現職。佐藤栄作記念国連大学協賛財団による第19回佐藤栄作賞最優秀賞(2003年)、「ユネスコ創立60周年記念メダル」授与(2009年)。主な著書に、ティムール・ダダバエフ、『記憶の中のソ連中央アジアの人々が生きた社会主義時代』、筑波大学出版会、285頁、2010年、ティムール・ダダバエフ、『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心—』、アジア経済研究所(アジアを見る眼110)(新書判)、216頁、2008年、ティムール・ダダバエフ、『マハッラの実像—中央アジア社会の伝統と変容—』東京大学出版会、368頁、2006年、Timur Dadabaev, *Towards Post-Soviet Central Asian Regional Integration: A Scheme for Transitional States*, Akashi Shoten, 240 pages, 2004がある。共編著に猪口孝、田中明彦、園田茂人、ティムール・ダダバエフ編『躍動するアジアの信念と価値観』、明石書店、608頁、2007年、猪口孝、ミゲル・バサネズ、田中明彦、ティムール・ダダバエフ編『アジア都市部の価値観とライフ・スタイル』明石書店、xv+506頁、2005年、などがある。

■ 島蘭進(しまぞの・すすむ) Shimazono Susumu

1948年、東京生まれ。東京大学大学院で宗教学を学ぶ。近代日本宗教史、比較宗教運動論を研究してきた。とくに日本の19世紀から現在までの、いわゆる新宗教の専門家と見られている。新宗教は主に神道や仏教や民俗宗教(folk religion)の伝統を引き継ぎながら、急速に発展したもので、創価学会を始め、まことに数が多い。アメリカ合衆国やアジア諸国の宗教についても関心をもって、日本との比較を心がけている。書物や文書資料による研究とともに、宗教集団のフィールドワークやインタビュー調査を行う。その後、宗教文化が現代の政治的、社会的、倫理的争点にどう関わっているかといった問題にも関心を広げている。日本の新宗教を世界の宗教史に位置づけようとした『現代救済宗教論』(青弓社、1992)、現代の日本とアメリカのニューエイジ運動について論じた『精神世界のゆくえ』(東京堂出版、1996)、オウム真理教について論じた『現代宗教の可能性』(岩波書店、1997)、新宗教教団、修養団捧誠会の教祖の伝記的研究である『時代のなかの新宗教』(弘文堂、1999)、幸福の科学等70年代以降の日本の宗教運動・宗教意識の特徴を考察した『ポストモダンの新宗教』(東京堂出版、2001)、近代日本の代替療法や日本的な心理療法について考察した『〈癒す知〉の系譜』(吉川弘文館、2003)、主な論文の英語版を集めた *From Salvation to Spirituality* (Trans Pacific Press、2004)、日本の生命倫理の審議について考察した『いのちの始まりの生命倫理』(春秋社、2006)、現代世界のスピリチュアリティ文化の歴史的意義について考察した『スピリチュアリティの興隆』(岩波書店、2007)、宗教学の前史から現代に至るまでの注目すべき著作を紹介した『宗教学の名著30』(筑摩書房、2008)、江戸時代末期から現代に至る国家神道の歴史を概観した『国家神道と日本人』(岩波書店、2010)などの著書がある。筑波大学研究員、東京外国語大学助教授を経て、東京大学教授(宗教学専攻)。カリフォルニア大学バークレイ校留学(1984–85年)。シカゴ大学客員教授(1996年)。1997年には、フランス社会科学高等研究院(Ecole des Hautes

Etudes en Science Sociales) の招聘教授としてパリに、2000 年にはチュービンゲン大学の客員教授としてそれぞれ 1 ヶ月、2006 年にはカイロ大学の客員教授として 6 週間、滞在した。以下のブログをご覧ください。最近の関心事がわかります。http://free.jinbunshakai.net/shimazono/

■ 陳 継東 (ちん・けいとう) Chen Jidong

中国安徽省生まれ。1988 年、北京大学哲学科の修士課程終了後、同大学哲学科において講師となる。1991 年、来日し東京大学に入学する。1999 年、同大学文学部から博士号を取得。2005 年から現職。主要著書は「近代仏教の夜明け—清末・明治仏教界の交流—」『思想』943 号、2002。『清末仏教の研究—楊文会を中心として—』、2003 (山喜房仏書林)。『北京紀事・北京紀遊』 (共著)、2008 (中華書局)。”The Transmission of the Jodo Shinshu Doctrine To China: The Discovery of “Nanjingyu Shuojiao” and its Significance,” *The Eastern Buddhist* Vol.40 No.1&2、2009。

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。

SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。

★詳細はホームページ (<http://www.aisf.or.jp/sgra/>) をご覧ください。